

意識の表象理論と錯誤主義

ハード・プロブレムからイリュージョン・プロブレムへ

篠崎大河(慶應義塾大学)

意識の哲学においては、「意識のハード・プロブレム」と呼ばれる問題が取り組まれてきた(Chalmers 2010)。これは、物理的プロセスがなぜクオリアを生じさせるのかという問題である。この問題への応答において、クオリアを物理主義的に還元する理論として最も有力とされているのは、意識の表象理論である。これによるとクオリアは、脳状態が表象する外界の対象が持つ性質として物理的世界に位置付けられる。意識の表象理論は、意識についてのもっともらしい説明を与えるため、支持者の多い立場となっている(e. g. Dretske 1995; 信原 2002; 鈴木 2015; Lycan 2019)。

意識の表象理論によるクオリアの物理主義的還元のプログラムは、大きく二つの部分に分けることができる。すなわち、(1)クオリアを表象に還元する部分と(2)表象を物理主義的に還元する部分である。それゆえ、(1)と(2)が接続されることによって、そしてそうされることによってはじめて、クオリアが物理主義的に還元されたことになる。しかし、(1)、(2)それぞれにおいて説得的な議論が提出されている(e. g. Tye 1995; Millikan 1984)ものの、両者の接続の方はいまだうまくいっていないとは言えない。なぜなら、物理主義的な表象概念を用いた意識の表象理論はいずれも、クオリアの説明においてある重大な問題を抱えているからである。

それは「例化の問題」である(信原 2002; 鈴木 2007)。例化の問題とは、脳状態によって表象される性質は、錯覚や幻覚の場合、実際には例化されていないため、そのようなときクオリアを実在していると考えることができないというものである。このような困難が生じる原因は、ミリカンやドレッキによって生み出された典型的な物理主義的表象概念は、ハード・プロブレムを中心とする意識の哲学とは異なる文脈(信念や意図などの、無意識的でもありうる心的状態を説明する文脈)で洗練されてきたものであるため、クオリアの存在を受け入れる十分な余地がないことにある。以上が正しいとすると、意識の哲学における最も有力な理論でさえ、クオリアの実在を認め、それを物理的世界に位置付けるという問題に十分に応答できていないことになる。

しかしだからと言って、意識の表象理論のプログラムを棄却するのは早計である。というのも、意識の表象理論がその説明力を発揮できないでいるのは、それが誤りを含むからではなく、そもそもハード・プロブレムの問題設定の方に誤りがあるからかもしれないからである。意識は何らかの説明を要する現象ではあるが、意識の哲学における問題設定の仕方がハード・プロブレムでなければならないわけではない。ハード・プロブレムの枠組みでは、意識の哲学の課題は「なぜ物理的プロセスがクオリアを生じさせるのか」という問いに答えることであるため、クオリアが存在することが前提になっているが、クオリアが存在するという主張は、その意味についてすら哲学者の間に見解の相違があり、真であることが自明というわけでもなければ、受け入れられうる唯一の立場というわけでもない。

実際、意識のハード・プロブレムは疑似問題であると主張する立場がある。それは、キース・フランキッシュが提唱し

た、錯誤主義(イリュージョニズム)である(Frankish 2017)。錯誤主義によると、クオリアはそもそも存在せず、したがって物理的世界にそれが位置付けられることはない。そして、意識の哲学が応答すべき真の課題はハード・プロブレムではなく、物理的プロセスが、実際にはクオリアを生じさせないにも関わらず、なぜクオリアを生じさせるかのように思われるのか、という問題、すなわち、「意識のイリュージョン・プロブレム」であるとされる。

意識の表象理論は、クオリアの実在を認めることを強いられるハード・プロブレムの問題設定においては、その説明力を発揮できないでいたが、上記のようなイリュージョン・プロブレムの問題設定においては、その限りではない可能性がある。というのも、表象理論のつまずきの石とされた例化の問題が、クオリアが例化されていることを認めなくてよい錯誤主義の枠組みでは、もはや問題ではなくなるからである。

しかし、意識の表象理論と錯誤主義を組み合わせるのには一見して困難がある。というのも、表象理論が直面していた例化の問題は、幻覚や錯覚のような誤った経験においてクオリアの存在を認めることができないということに過ぎないためクオリアの存在の全面的な否定を含意しないのに対し、フランキッシュの提唱する錯誤主義は経験の種類に関わらずクオリアを全面的に錯誤として考えるので、両者の間にはギャップが存在するからである。

本発表の目的は、以上のようなギャップを埋めることが可能であると示すことで、意識の表象理論が錯誤主義の枠組みにおいてより説得的な仕方でも再構成されうることを明らかにすることである。またそれによって、イリュージョン・プロブレムがハード・プロブレムと同等以上に取り組むに値する問題設定であると主張する。

参考文献

- Chalmers, D. (2010) *The Character of Consciousness*. Oxford University Press.
- Dretske, F. (1995) *Naturalizing the Mind*. MIT Press.
- Frankish, K. (2017) "Illusionism as a Theory of Consciousness" *Illusionism: As a Theory of Consciousness*. K. Frankish (ed.), Imprint Academic, pp. 11-39.
- Lycan, W. (2019) "Representational Theories of Consciousness" *Stanford Encyclopedia of Philosophy*.
- Millikan, R. (1984) *Language, Thought, and Other Biological Categories: New Foundations for Realism*. MIT Press.
- Tye, M. (1995) *Ten Problems of Consciousness: A Representational Theory of the Phenomenal Mind*. MIT Press.
- 鈴木貴之(2007) 「訳者解説」 F. ドレッキ 『心を自然化する』 鈴木貴之訳、勁草書房。
- (2015) 『僕らが原子の集まりなら、なぜ痛みや悲しみを感じるのだろうか——意識のハード・プロブレムに挑む』 勁草書房。
- 信原幸弘(2002) 『意識の哲学——クオリア序説』 岩波書店。